

＝ 故 曾我 一夫さん 追悼 ＝



メディカルライティング研究会「METRO」巻末に収載の「ぶらり近江のみち」を、長年にわたりご執筆下さった曾我一夫さんが昨年12月2日に85歳で逝去されました。会員の皆様に、あの特色ある記事の続編が読めなくなったことをお伝えしなければならないのは大変残念であります。

曾我一夫さんは昭和18年京都師範学校（現京都教育大）を卒業、京都府下で小学校に勤務された後、約2年間兵役に就かれ、終戦により復員ののち昭和21年より新聞記者を志されました。京都日日新聞、京都新聞を経て、昭和27年読売新聞に移り、阪神支局長、松山支局長、高松支局長等を歴任、昭和52年大津支局長を最後に定年退職されました。

同年、滋賀県の委嘱を受けて県のシンクタンクである財団法人滋賀総合研究所事務局長、さらに2年後には新発足の滋賀県中小企業情報センター所長を兼任されました。曾我さんの取り組んだテーマの一つは多数の「近江商人」を生

んだ近江の独特の風土・習慣の伝統がどのように受け継がれ、現在の近江路で育ち、立派な事業を営んでいる「今様近江商人」はどのような考え方で商人道を追及しているかを明らかにすることでありました。

そのために情報センターの情報誌「企業の窓」に「こんにちは社長」の連載を企画し、地場の中小企業のユニークな会社にしぼって社長を取材、それぞれの持っている独自の技術、経営理念などの個々の情報を取りまとめ、情報提供することを開始し、この活動により滋賀県では多様な業種が「さすが近江商人発祥の地」という取り組みを行っていることが明らかになりました。連載は16年6ヶ月に亘り200人の社長へのインタビュー記録として集積され、平成9年に「こんにちは社長 - 200人の経営哲学 - 」として取りまとめられ、滋賀総合研究所・中小企業情報センターより刊行されています。

読売新聞社大津支局長としての経験に加え、この長年月の滋賀県下を巡る取材の副産物として、故人は近江のみちの歴史・遺跡・風土などへの興味を温めていったのではないかと推測いたします。昭和57年叶匠寿庵企画室長に就任、のち同寿社「長生の里」室長に転勤し平成14年まで勤務、その間、株式会社ホンネットの創業に当たって、種々アドバイスをを行うとともに、監査役を勤められました。

「ぶらり近江のみち」のMETROへの連載は、2002年7月1日の「栗東歴史民族博物館を訪ねて」から始まり、第44回「もう一人の義経（滋賀湖北町）」（METRO 201号、2008年9月1日）まで続いています。曾我さんはこの執筆に取り組まれることを、晩年の生きがいとされていたようで、嬉々として取材に赴き、写真も自ら新たに撮り、記者としての経験に裏打ちされた健筆を振るわれました。80歳を越えても、独特の味のある文章で興味ある記事を書き続けたその生涯は、ライターを志す人の模範であったといっても過言ではないでしょう。

METRO編集委員会は、曾我さんの業績を顕彰のために、連載された「ぶらり近江のみち」を検討・整理の上、単行本として刊行する作業を進めることに致しました。2009年末までには完成させたいものと考えております。嘗て、編集委員の有志が、「ぶらり近江のみち紀行」と称して、曾我さんが紹介された名所・旧跡・博物館・仏閣などを訪ね、記事の内容をフォローして楽しんだことがあります。完成した本がそのような目的にも広く利用されることを心から望んでおります。それが我らの先人、故曾我一夫さんのもっとも喜ばれる所でありましょう。





METRO

Medical English Translation Research Organization



目 次

- ◆ No.206 の和訳課題 [0902A-1] [0902A-2] p.1
- ◆ No.206 の英訳課題 [0902B] p.1
- ◆ ライティング例の提出方法 p.1
- ◆ 参考資料・用語解説 p.2
- ◆ 事務局だより p.3
- ◆ No.204[0812A] 参考ライティング例・研究報告のご紹介(和訳) p.4
- ◆ No.204[0812B] 参考ライティング例のご紹介(英訳) p.6
- ◆ 新・お勉強シリーズ その1 p.7
- ◆ 医薬情報 第36回・新薬情報 - 「抗ウィルス薬について」 - p.12
- ◆ 故 曽我 一夫さん 追悼 p.15
- ◆ **ぶらり近江のみち** 第46回 - 大 溝 城 - p.16

No.206

2009.2.1

Medical Writing Association

